

『ロマンス作家の恋人』

著：秋山みち花

ill：北沢きょう

さすがに本場イギリスとあって、ラッセル城の庭園も素晴らしい。見事なコンサバトリーをはじめとして、薔薇園、ハーブを集めた一角など、色々と趣向が凝らされていた。

まだすべてをチェックしたわけではないが、オークの大木のそばにある四阿(あずまや)は特に気に入っている。そこで木漏れ日を浴びながら読書を楽しもうと思っていた。

だが、四阿に近づいた理央は、そこにキースの姿があるのを認め、足をすくませた。白い大理石で造られた四阿は円形で、六本の柱が立っているだけだ。中に座り心地のいい木製のベンチとテーブルが据えてある。

キースはそのベンチに長身を横たえ、クッションを枕に本を読んでいた。

その表紙が目に入った瞬間、理央は鋭く息をのんだ。

自分の目がおかしくなったのではないかと瞬きをするが、それでも間違えようはなかった。

繊細なイラスト入りの新書——それは、理央のデビュー作だった。

「……な、なんで……っ」

思わず呻(うめ)くような声を出すと、キースがそれと気づいてゆっくり身を起こす。

「なんだ、リオ、おまえか……」

なんでもないように呼びかけられても、理央はしばらくの間答えることもできず、ぶるぶる身体を震わせているだけだった。

何故、この男がこの本を持っているのか？

何故、わざわざ自分の本を読んでいるのか？

「そんなところに突っ立ってないで、こっちに来て座ったらどうだ？」

そう声をかけられて、理央は操り人形のようにぎこちなくキースに近づいた。

仕方なく横に腰を下ろすと、キースが端整な顔に笑みを浮かべる。

「……そ、それ……どうして？」

「ああ、これか……。城に滞在するゲストの作品だ。チェックしておくのが筋だろうと思って、取り寄せた」

「わざわざ日本から？」

衝撃から立ち直れないままでぼんやり訊ねると、キースはますます笑みを深める。

きれいな微笑みに、何故か心臓が高鳴った。

「もちろん日本から取り寄せた」

「でも……どうして、こんなに早く……？」

「日本はヒマラヤの奥地というわけじゃない。一日で物を入手する方法などいくらでもある」

「……そう、なんですか……」

理央はふうっとため息をついた。

「種明かしをしてほしいか？」

「別にそんなの……」

からかい気味に訊かれ、理央は慌てて首を振った。

だが、キースは気軽にその種明かしをする。

「日本にもうちの支社がある。書店に買いに行かせて送らせてただけだ」

「……はあ……」

理央は脱力しながら頷いた。

入手方法は解明されたが、どうしてそんな手間をかけたのかは、相変わらず謎のまままだ。

「ところで、これはなかなかロマンチックな話だな」

キースはのんびりとした口調で、そんな感想を口にする。

だが、そこまできて、ようやく理央は大事なことに気がついた。

「な、なんで……日本語なのに……？」

「別におかしくはないだろう。日本語は以前徹底してやった。読み書きにも不自由はない」

「あっ！」

理央は驚愕で目を見開いた。

今の今まで気づかなかったが、キースは日本語をしゃべっていたのだ。

狐につままれたような気分だった。本当に底の知れない男だ。

けれど、そのキースは今までの傲慢さをおくびにも出さず、穏やかな表情を浮かべているだけだ。

端正な顔、そしてラピスラズリの深い眼差しでじっと見つめられ、理央は喘(あえ)ぐように胸を上下させた。

何故か急に羞恥が湧く。頬に血が上ってくるのを止められなかった。

キースは別にかからかうようなことを言ったわけじゃない。それなのに、自分が甘い恋愛小説を書いていたのを知られ、恥ずかしくてたまらなくなった。

「に、日本語ができるなら、そう言ってくれればいいじゃないですか」

理央は故意に視線をそらし、咎(とが)めるようなことを口にした。

「おまえは英会話に不自由していなかった。それに、言葉など、どっちを使おうとどうでもいい。コミュニケーションが取れさえすればいいだけだ」

そう、当たり前のことを言われても、すぐには納得がいかない。

今まで騙(だま)されていたようで、悔しさが残った。

ぶすつとしたままでいると、キースがふんと鼻を鳴らす。

しかし、次の瞬間、そのキースの手でいきなり顎(あご)をつかまれた。

「え、な、に……っんっ」

くいつと引き寄せられて、唇に温かなものが押しつけられる。

驚きが勝って、抵抗するどころではなかった。

されるがままになっていると、キースの手が後頭部にまわり、もっと深く口づけられてしまう。

「んう……ん、くつ……うふ……っ」

唇のラインを舌でなぞられて、理央は遅ればせながら頭を振った。

けれどもキースの手でがっしり後頭部を押さえられているせいで口づけは解けない。それどころか喘(あえ)いだ隙に舌まで挿(さ)しこまれてしまう。

「……んんっ、……うう……ん、ふ……っ」

熱い舌で口中をくまなく探られた。
かあっと急速に身体が熱くなる。
酸欠でどうにかかなりそうなのに、キースは少しもキスをやめようとしな
舌をいやらしく絡められると、何故か身体中が甘く痺(しび)れてくるようだ。
頭も霞(かすみ)がかかったようにぼんやりする。それでも、ねっとりとなぞられる舌の
感触だけはやけにリアルでぞくぞくする。

どうしてキスなんかされているのだろう？
キースは男で、自分だって男なのに、どうしてキスがこんなに気持ちいいの
口づけを受けながら必死に考えようとするが、具体的な答えは何も思い浮かばな
った。

「……ん、く……んっ、う」
キースの腕が背中にまわり、しっかりと抱きすくめられる。
そのうえで、ますます濃厚に唇を貪られた。
唾液が溢れ、唇の端からだらしなく糸を引く。
ぐったりと身体中から力が抜け、理央は無意識でキースに縋(すが)りついた。
もう頭が朦朧として何がなんだかわからない。口づけられている熱さと甘さだけが
べてだった。

そのうちに、キースの手が胸にまわり、そろりと探るように撫でられる。
「……んっ、ん、……っ！」
ずきんと強い刺激が走り抜け、理央ははっと我に返った。
薄いシャツを着ていただけだ。キースの掌がそこを掠めたとたん、思いがけず鋭い
刺激が走り抜けた。

理央は必死になってキースの口づけから逃れた。
「……っ、はあ、……っ、な、……な、んで……っ」
いきなり口づけてきたことを咎めようとするが、息が乱れてまともに声も出ない。
心臓は狂ったように高鳴り、身体中熱くて肌がびりびりするほど粟(あわ)立(だ)って
いた。

キースはようやく腕を外したが、表情ひとつ変えていない。にやりと余裕の笑みを浮
かべているだけだ。

「おまえの書いた話に出てくる恋人たちに足りないのは、情熱だな」

「な、何を言って……？」

にらみつけてやろうと思っても、目が潤んでいる。迫力など少しもない。

「おまえ自身は、どうなんだ？」

謎めいた言葉に理央は眉をひそめた。

キースは再び手を伸ばしてくる。長い指の先で意味ありげに唇のラインをたどられて、
理央は緊張した。

こくりと喉を上下させると、間近でじっと覗きこまれる。

青い瞳にわけもなく引きつけられる。底の知れない深淵に吸いこまれていくかのよう
な恐怖も感じる。

思わず唇を震わせると、キースは極上の微笑を浮かべながら手を引く。

「まだ何も知らないようだな……もし、本当の情熱、いや、欲望がどんなものか知りた
くなったら、いつでも俺に言ってこい。手取り足取り、丁寧に教えてやるぞ」

キースの言葉が何を意味するか理解したせつな、ひときわ大きく心臓が音を立てた。理央はとっさに身体を退いた。そして足がぐらつくのもかまわず、ベンチから立ち上がる。

「よ、よけいなお世話です！ あ、あなたの助けなんか、いらないうつ」

「なんだ、つれない言葉だな、リオ。おまえは十分に可愛い。俺のほうに不満はないが」

からかうような声音に、いっぺんに怒りが再燃した。

「ぼくの名前は理央です。リオじゃない。それに、もうぼくには近づかないでください。最初に住み分けすると言ったのはあなたのほうだ。……それを、守ってくださることを期待します」

理央は精一杯の虚勢を張って、危険な男に背を向けた。

本文 p54～62 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>